



TITLE:

## 最近五十年支那學界の回顧

AUTHOR(S):

マスペロ, アンリ; 内藤, 耕次郎; 内藤, 戊申

---

CITATION:

マスペロ, アンリ ...[et al]. 最近五十年支那學界の回顧. 東洋史研究 1935, 1(1): 22-38

ISSUE DATE:

1935-10-20

URL:

<https://doi.org/10.14989/138668>

RIGHT:

## 最近五十年支那學界の回顧

は し が き

最近半世紀に於ける歐米を中心とする支那學界の總めくりとも云ふべきこの一文の筆者、パリーのコレージュ・ド・フランス教授アンリ・マスペロ氏に就ては今更改めて説明する必要があるまい。原文はパリーのフェリックス、アルカン Felix Alcan としふ本屋から出してゐる歴史評論叢書 Bibliothèque de la Revue Historique の一冊、「最近五十年間の歴史と歴史家」Histoire et Historiens depuis cinquante ans の一節で、同書の五一七頁より五五九頁に至る四十三頁である。この本は五十人に近い學者が夫々専門の部門を受持つて書いて居るものらしいが、その中の「支那及び中央亞細亞」の部をマスペロ氏が擔當されて居るわけ

アンリ・マスペロ

内藤耕次郎 共譯  
内藤 戊申

ある。この翻譯はマスペロ氏から亡父湖南博士に贈られた抜刷によつたもので、譯者はこの本を持つて居ない爲にその出版された年を知る事が出来ない。但し、この本のサブ・タイトルに「一八七六年より一九二六年に至る迄の歴史的研究の方法、組織及び成果」とあるから一九二六年以後間もなく出版されたものに違ひない。

共譯者耕次郎學士は私の次兄で、元來支那學に通じてゐるわけでもなく、フランス語に堪能なわけでもなかつたのだが、一昨年瓶原に於て父の秘書をしてゐた頃、父の勸によつて僅か十日間にフランス語の文法を獨習して後、直に辭書と首引きで翻譯に着手したのであつた。その後私が多少の

改訂を加へて、原稿はその年の秋、父の渡満前に一先づ出来上り東洋學報に掲載するといふ話などもあつたりしたのだが、實現に至らずして今日に至つたのである。(譯者記)

歐羅巴の支那學者は印度や其他の東洋諸國を研究する歴史家達より遙かに恵まれて居る。と云ふのは過去數百年來支那の學者達は歴史の編纂、目錄の作製、辭書や類書の編纂、史評に關する論文や書物の作製、古人の書に對する批判的著述、碑銘の蒐集等の仕事に熱心に従事し續けて來たので已に立派に一つの輪廓が出来上つて居るからである。それ等の莫大な勞作は成程彼等支那學者の研究を容易ならしめはしたが、其代り彼等は長い間それ等に威壓されて了つて、敢て論議することなしにそれ等を受け入れて居た。歐羅巴人が支那の學者を批評し反對し始めたのは僅々三十年來の事に過ぎなう。支那人の囚はれた考へ方から最初に脱したのは Éd. Chavannes であつて、彼は支那學に西洋風の言語學の方法を適用した。又略々時を同じうして A. Conrady は支那人の傳統的な若干の—殊に古

代に關する—見解から離れて自由な考へを持つ様になり、更に Berold Laufer 氏は眞に科學的な支那考古學を創建した。現在では歐羅巴人の方法が却つて支那人の支那學に影響し始めるといつた状態になり、且その考へが急速度に擴がるに従ひ歐羅巴や亞米利加で爲された研究と極東の學者の研究とを切離して考へる事が次第に困難になつて來て居る。それに或種の問題(佛教、美術史等)に關しては日本の學者の著作が最も重要であつて、之を等閑に附する事は出来ないものがある。だからこゝには西洋の學者と共に日本や支那の學者の名をも一緒に擧げることにする。蓋し多くの研究は互に相關聯し、相補つて居るからである。

支那に關する全般的な參考書の歐文で書かれたものは非常に少い。支那の識者が支那人の爲に作つたものがあつて、之は西洋人と立場を異にしては居るが、それ等を利用する事は出来る。其缺陷を補はんとしたのが Samuel Couling 氏の著「支那百科辭典」Encyclopaedia Sinica, 1917 はあらゆる支那の事物の簡單な智識を集めたものである。P. Wiegner の「支那語話法及文體の初歩」集 Rudiments de parler et de style chinois,

12 vol., 1896-98 は言語、歴史、宗教、哲學、文學、傳説等の見地よりせる——即ち海外布教師用の——支那の社會の眞に系統的な百科辭典とすべきかも知れない。但し其材料が其書の結構を壞して居つて、互に關係のない數々の提要書に細分されて居る嫌がある。以上のものより更に古い諸書はその當時は利用されて居たが今日では最早役に立たない。然し兎も角我我は歐米人の手に成る莫大な量の支那に關する出版物の手引として完全な編纂物を持つて居る。Henri Cordier の「支那書誌」*Bibliotheca Sinica* (第二版一九〇四年刊、増補一九二二年、索引近刊) がそれである。支那文學に關しては、歐羅巴にも支那にも書誌學的良好い手引書が無い。Wylie の *Notes on Chinese literature*, 1867 は一七八二年に完成した勅撰の大書目(四庫全書總目)を輕便に要約したものである。又桂氏の手引書はもう少し詳しいが矢張り便利である。更に又支那の學者の爲に作られた張之洞の入門書を見れば最も重要な著書の通行の版本を容易に知る事が出来る。科學的に作られた書目では唯一つの題目に就いてしか存在しない。それは古代法の歴史に就いてであつて Pelliot 氏が取

扱つたものである。

#### 註

- ① 桂湖村「漢籍解題」一九〇五年刊。張之洞「書目答問」一八七五年刊。Pelliot, *Notes de bibliographie chinoise*, II, *Le droit chinois* (支那の法) B.E.F.E.O., IX, 128-159, 所載。

一般史としては、支那文明の起りから今日迄の諸事件の關聯を概説したものに Cordier, Boulger, Mac Gowan, P. Wiegner のものがあり、又 Herbert Giles 氏は著名な人物の傳記を集めて一つの辭書とした。此種①のものは支那及び日本にもある。

#### 註

- ① Cordier, *Histoire générale de la Chine et de ses relations avec les puissances occidentales depuis les temps les plus anciens jusqu'à la chute de la dynastie mandchoue*, (支那通史及び上古より清末に至る支那と西洋諸國との關係) 1920-22.  
Boulger, *History of China*, 1881-81.  
Mac Gowan, *A History of China, from the earliest days to the present*, 1897.  
Wiegner, *Textes historiques*, 1902; *La Chine*, 1923.

Giles, A Chinese biographical dictionary, 1898,  
中國人名大辭典 一九二一年刊。

文學では<sup>①</sup>Giles 氏の Grube の二つの小文學史及び大家の詩文の選集がある。宗教では儀式的な事實を集めた資料として特に役に立つ De Groot の大部な「支那の宗教組織」Religious System of China, 1882-1907. があり、古代及近代の宗教的感情の分析を試みた者 M. Granet の「支那人の宗教」La religion des Chinois, 1922. があり、時代の移りにつれて思想の進化を跡づけたものに P. Wiegert の「支那に於ける宗教的信仰と哲學的學說の歴史」l'Histoire des croyances religieuses et des opinions philosophiques en Chine, 1917. がある。一方日本に於て立派な佛教辭書即ち佛教大辭彙(一九一四—一七年刊)及び織田得能、佛教大辭典(一九一七年刊)が出版されてゐる。日本人は又、漢文に譯された、或は漢文で書かれた佛書の集成である大藏經—梵名 Tripitaka —の立派な出版を二つ爲て居り、支那人も最近一つ出版してゐる。支那人は此の外に極く最近道教の書を集めた道藏を再版した。

註

① Giles, A history of Chinese literature, 1901; Gems of Chinese literature, 1884.

Grube, Geschichte der chinesischen Literatur, 1902.

支那學の最も重要な研究は又これ迄種々の雜誌に於て爲されて來たし現在も爲されてゐる。例へば東洋全體に關しては<sup>①</sup>Journal asiatique, Journal of the Royal Asiatic Society, Osiatische Zeitschrift, Mitteilungen des Seminars für orientalische Sprachen 等の如きものがあり、特に極東に關しては T'oung-Pao (通報) Bulletin de l'École française d'Extrême-Orient, 東洋學報, China Review, Journal of the China Branch of the royal Asiatic Society, Chinese recorder 等の如きものがある。最近國學季刊、支那學 Asia Major 等の定期刊行物が創設された事は支那學研究の發展上慶賀すべき事である。

註

① 此等の雜誌の名は次の様に略して書くことにする。

J. as.; J. roy As. Soc.; O. Z.; Mitt. Sem. or.

Spr. ; Tp. ; B.E.F.O. ; Ch. Rev. ; J. Ch. br. ;  
Ch rec ; As. Maj.

## 一、古 代

支那古代に關する吾人の知識は何よりも先づ所謂「古典」に由來してゐる。今日我々は次の二つの良き譯本によつてそれ等を読む事が出来る。一は P. Couvreur<sup>①</sup> のもので、官學の傳統をそのまま祖述し、一般の學者に認められた意味を再現して居り、他は Rev. Legge のもので、之は前者に比べると私見を交へた解釋を施して居る。この時代のみの良い歴史書は無いけれども、Hirth<sup>②</sup> の簡単な概説及び Le. P. Tschape の諸侯に關する各論は主なる史實の手引として使ふ事が出来る。

註

- ① P. S. Couvreur, *Le Chou king* (書經), 1897 ; *Le Chou king* (詩經), 1896 ; *Se chou, les quatre Livres* (四書), 1895 ; *Le Tch'ouen tsieou et le Tso tchouan* (春秋及左傳), 1914.  
Rev. J. Legge, *Chinese classics*, 5 vol., 1861-72 (支那古典概略)

② Fr. Hirth, *The ancient history of China to the end of the Chou (周) dynasty*, 1908.

Le P. A. Tschape 著 *Variétés sinologiques*, n° 10, 1896 ; n° 22, 1903 ; n° 27, 1909, n°s 20-31, 1910. に於て吳、楚、秦、晉等の國々の歴史を書いて居る。

支那人のものにせよ外國人のものにせよ、非常に古い文獻は無いので吾人は支那の文明の起源に就ては何等知る事が出来ない。Terrien de Lacouperie がこの起源をバビロニア文明に結び付けんと試みて失敗して以來、其後支那文明のスマル起源説を Ball 氏が唱へたりはしたが、結局支那文明の西方起源説は斷念された。其發祥地を渭水(陝西)の流域なりとする Legge の説や、その發祥地を陝西よりして東は黃河の下流、南は楊子江に至る地域なりとする Richthofen の説も行はれなくなつた。之に就て Conrady は山西と河南の境、即ち黃河の中流に跨る地方を唱へ出して居り、Henri Maspero 氏は支那の植民が蠻人の國々に如何に影響したかを指摘して直隸の大平原を採つた。近頃

⑦Andersson 氏が行つた新石器時代の傾斜面發掘の結果は北部支那の居住民が今日に至る迄人類學的に殆ど變化しなかつた事、及び有史以前に於て地中海文化の影響が若干あつた事を示して居る。

註

①Terrien de Lacouperie, Western origin of the Chinese civilization, 1894.

②C. J. Ball, Chinese and Sumerian, 1913.

③Legge, Ch. Cl. (支那古典) 序文より第三、五卷まで。

④Richthofen, China, I, passim.

⑤Conrady, China [1910], Pflugk-Hartung's Weltgeschichte. 所載。

⑥H. Maspero, Les origines de la civilisation chinoise, Ann. de géogr., 1926, 135-154 所載。

⑦J. G. Andersson, Stone implements of neolithic type in China, China medical Journ., July, 1920 (Anatomical suppl.) 所載。The cave deposit at Sha Kuo t'un' Fêng-tien (奉天' 沙鍋屯), Geol. survey of China, Paleontol. Sinica, series D, v. I, fasc. 1, 1923 所載。An early Chinese culture, Bull. of geol. survey of China, fasc. 5, 1923 所載。Preliminary report on archaeological research in Kansu (甘肅), Mem. geol. survey of China, 1925.

所載。

Arne, Painted stone age and pottery from the province of Honan (河南), China, Paleontol. Sinica, I, 2, 1925 所載。

Black, The human skeleton remains from the Sha Kuo t'un deposit (沙鍋屯), 同上 I, 3, 1925 所載。

かゝる太古の歴史に就ては幸ひ二十年程前に一つの考古學的發見があつてその片鱗が窺へる様になつた。それは即ち西紀前十二世紀乃至十一世紀頃に當る殷朝末期諸王の頃のものと思はれる記録のある龜の甲である。其大部分は支那の學者羅振玉氏が判讀し、イギリスの支那學者 Hopkins 氏や支那の王國維氏、日本の後藤氏等の學者も之に參與した。それはつまり神託の記録であつて、龜甲や獸骨が占に用ひられたのである。その上には王の間や、時としてはその答が彫りつけられてあり、かの悠久な時代の王者の生活の一斑を示して居る。丹羽氏は之等によつて東部の平原の支那人は殷代には主として狩獵に従事し牧畜及び農業は殆どやらなかつた事、之に反して周の所領である渭水の流域の支那人は牧畜及び農業を主なる生業として居た

事を證し得ると考へた。小島氏は之を反駁したが、その反駁は尤もだと思はれる。

註

① Éd. Chavannes, *La divination par l'écaïlle de tortue dans la haute antiquité d'après un livre de M. Lo Tchen-yu* (羅振玉氏の書に見えたる、上古に於ける龜甲占筮), *J. as., X, xvii*, 1911, 127-137. 所載。

Tchang Fong (張鳳), *Recherches sur les os du Ho-nan et quelques caractères de l'écriture ancienne* (河南の骨及び古代文字の若干の特徴に就ての研究), 1925. (同書の初の三頁より九頁までに支那及び歐羅巴の立派な書誌を擧げてゐる)

② Hopkins, *Pictographic reconnaissances* (象形文字の探究), *J. roy. As. Soc.* 1917-24 所載。The sovereigns of the Shang dynasty (商朝), 同上 1917. 所載。The Homan reïces, 同上 1921. 所載。

③ 丹羽正義。殷周革命。支那學、第三卷、九月號、一九二四年、二十七頁以下所載。

④ 小島祐馬。殷代の産業に就て。同上、第三卷、十月號、一九二五年。所載。

文辭的な文獻はさう大して買ひ被る譯にはいかない

のであつて、それ等の文獻の價值に就ては大いに論議の存する所である。その最も主なるものは散文の記録を集めたもの、即ち書經である。言ひ慣はしによれば之は最初孔子が教訓的立場によつて澤山の中から百篇を選び出して出来たものであるが、古代に於て既に致命的な喪失を蒙つた。漢の時代に、部分的な發見は別として、不完全ではあるが纏つた原典が二つ相繼いで現はれた。一つは官學に採用せられ、今一つは纂奪者王莽(西紀九—二十二年)の時に一時採用されたが間もなく再び棄てられ、遂には亡びて了つた。四世紀の頃その偽書が作られたが、降つて十八世紀に支那の學者達がその偽書たる事を宣告した。Chavannes は彼等の研究を要約し、又最近 Pelliot 氏はこの問題を再吟味してその製作年代を確定し得た。結局書經の凡そ半分だけが眞物なのである。然らばそれは一體何時頃出来たものであらうか。それを知る爲には夫々起源の違つてゐる諸章を一つ一つ研究しなければなるまい。橋本氏はその研究を企てたが成功しなかつた。他の學者達は又ある一部分に手を着けた。Kingsmill は禹貢の中に二つの記録が混入してゐるのを判別した



が、その製作年代は別には明かにはならなかつた。Con-<sup>④</sup>radt はそれをずつと古いものとしてゐるが、一方には又ある若干の文字が使はれて居ることを以て後世の僞作の證なりとする傅斯年氏の如きもある。此兩極端の間に在つて Chavannes はそれを前八世紀に置いてゐる。尙又 L. de Saussure 氏の如く堯典の一節が紀元前二十四世紀迄溯るかも知れないとする人もある。<sup>⑥</sup>内藤氏はその纂集の中の諸篇が何れも孔子の學派の影響を強く受けたものに違ひないと思はれる所からしてそれらの諸篇は紀元前五世紀より二世紀にかけての孔子學派の發展につれて順次に一つづつ卷頭に附け加へられて出来上つたものであると考へ得るとして居る。以上の如き状態ではこの書物の歴史としての價值如何は殆ど分らないと云ふも過言ではあるまい。事實一方<sup>⑦</sup>には Wademeier 氏の如く最古の帝王達―彼は堯及舜のことを言つてゐるに違ひないのだが―を確定的な歴史人物なりとして、その事蹟や時代を論ずる人もあり他方には Schindler 氏の如く舜を一つのト―テムなりと考へる人や小川氏の如く禹の傳説を研究した結果、<sup>⑧</sup>その神話的特徴を明かにした人もあるのである。H.

Maspéro 氏は歴史的事實の中に、故意に假装した若干の假の傳説がある事を示して居り、Granet 氏は傳説<sup>⑩</sup>夫自身の形式の中に傳統的な解釋や觀念の聯合の影響があるとしてゐる。

要するに傳統主義的な傾向は次第にその地盤を失つて、次の様な事が漸く明かになりつゝあるのである。即ち支那の古代史は比較的新しい時代に於て形成された一つの體系に従つて作り改められたのだ。その時代<sup>⑪</sup>をば Haloun 氏は紀元前五世紀から三世紀までの間の戰國時代とする事を提議してゐる。且又この時代の著作はそれ以前の長い期間の類似の著作を集大成したものであつたらうことは見易い所である。

註

① Chavannes, Mémoires, hist., t. I, Introd., CXIII-CXXXVI.

Pelliot, Le Chou king en caractères anciens et le Chang chou che wen (古文尙書と尙書釋文); Mémoires, concern. l'Asie orient., II, 1916, 125-177. 所載。

② 橋本増吉、書經の研究。東洋學報、一九二―四年所載。

③ Th. Kingsmill, The structure of the Yu Kung

(禹貢), Ch. Rev., XIV, 17-21 所載。

④Conrady, China, 481, 519, 526. 所載。

⑤L. de Sausurre, Le texte astronomique du Yao tien (堯典), Rev. gén. des Sciences, 1907. 所載。

Les origines de l'astronomie chinoise, T'p., 1909-11, 1913-14, 1920-22. 所載。

Le système astronomique des Chinois, Arch. des Sc. Phys. et Natur., 1919-20 所載。

⑥Une interpolation du Che ki (史記の註), J. as., CCVI, 1925, 265-392 所載。

⑦Wedemeyer, Schauplätze und Vorgänge der alchimischen Geschichte, As. Maj., Prel. Vol. 463 以下所載。

⑧小川琢治。支那上古の天地開闢と洪水の傳説。藝文、一九一三年所載。

⑨H. Maspero, Légendes mythologiques dans le Chou king (書經に見ゆ神話的傳説), J. as., CII, 1924, 1-100 所載。

⑩M. Granet, Danses et légendes de la Chine ancienne (古代支那の舞踏と傳説), 1926.

⑪G. Haloun, Die Rekonstruktion der chinesischen Urgeschichte durch die Chinesen, Japan. deutsche Zeitschr. für Wissensch. und Technik, III, 1926.

所載。

最初の年代記は紀元前七二一—四八〇年の魯公のそれである。即ち春秋であつて孔子の作とされてゐる。此書の古さに關しては曾て論議されたことがないが、そんな事は無味乾燥なことであり、殆ど興味の無い事なのである。之に反して、その傳統的な註釋である左傳に關しては、劉逢祿が十九世紀の初めにそれが西曆一世紀末の偽作である事を證明しやうとした。この説は最初は殆どものにならなかつたが、一八九八年に於ける改革派文學者の小團體の首領であつた康有爲が特に政策的な理由から之を採用したので近年になつて再び浮び上り、支那の少壯言語學派によつて認容されるに至つた。日本では飯島氏が曆日と天文のみに關する論據から此説を支持することに努めた。最近 Francke 氏は歐羅巴に此説を紹介したが、こちらでは餘り味方を得なかつた。大部分の學者は左傳が或る一定の古さを持つものである事は認めて居り、L. de Sausurre の如きはその中の占星術の逸話が略々西紀前三七五年迄溯ると云ふ事を證明した。その書中に後世の事件に關

する豫言があるのでとかく人はその製作年代を四世紀と三世紀の間に置きたがるのであるが、之には後からの竄入のあることを忘れてはならない。意見がかくの如く區々なりとすればそれはこの書が二つの別の著作の混淆であると云ふことになるわけである。二つと云ふのは、一つは春秋の典禮の甚だ怪しい註釋で、今一つは漢代に始めて春秋の註釋として採用されたが、元來は春秋とは無關係な一つの歴史的著作とである。判斷の相違は結局注意がどちらに向けられるかによつて起るのである。然し乍ら左傳が古代社會を知る爲の第一流の資料たることには異論を挟む餘地が無い。かゝる資料的見地からするならば、左傳より少し新しい書である國語を附加して置く必要があらう。この書は支那でも歐洲でも當然惹くべき注意を之まで惹かなかつた。<sup>④</sup>Harlezのくだらない抄譯はあるが、これでは充分内容が分らなう。

註

①飯島忠夫。漢代の曆法より見たる左傳の僞作。東洋學報。第二卷、二八—五七頁、一八一—二一〇頁所載。

②Studien zur Geschichte des konfuzianischen Dogmen und der chinesischen Staatsreigion : das

Problem des Tsch'un-t'iu und Tung Tschung-schu's Tsch'un-t'iu fan lu (孔子の教義並に支那の國教の歴史の研究。春秋の問題と董仲舒の春秋繁露), 1920.

③L. de Sausure, Les origines de l'astronomie chinoise, T. p. 1914, 645-696 所載。

④C. de Harlez, Koue-yü (國語), 最初の部分に J. as. IX, II (1893), 373-419; III (1894), 5-91; 第二の部分は 1895. 所載。

吾人は不幸にして封建社會の末期に當る戰國時代(前四、三世紀)に對しては史料の價值ある何等の著述をも持つてゐない。當時に在つては流説が眞實の歴史物語として通つたものであり、現に戰國策はそれ等の物語の中から長い文章を引用してゐる。<sup>①</sup>又それ等の中で部分的に残つた一つ(穆天子傳)はそれを翻譯した Eitel や Chavannes 及び L. de Sausure によつて研究されたが、併し彼等はそれにありもしない歴史的價值を附與したのであつた。(歴史的な事件の順序は魏の國の小年代記なる竹書紀年に書かれて居る。(此書の原本は竹票で作られたものである) Biot ③ u. Legge

の譯がある。この竹書紀年は西紀前三世紀の初めに墓の中に入れられ、西紀二八一年に再び発見されたが五、六世紀間に不幸にも多くの改竄が加へられた。この書の眞實性に就ては大いに論議されたが、<sup>④</sup>Chavannes は之が眞物なる事を認めた。神話學及び民俗學上重要な地理學的小篇たる山海經に就ては小川氏が深く探究するところあり、又<sup>⑤</sup>Laufer 氏はその中の或る傳説を希臘の傳説と比較研究した。古代支那に對する外部からの影響、特に印度の影響の問題については<sup>⑦</sup>Conrady 及び飯島氏がその荒筋を書してゐる。

## 註

- ③H. Maspero, *Le Roman de Sou Ts'in* (蘇秦の物語), *Études asiatiques publiées à l'occasion du 25e anniversaire de l'École française d'Extrême-Orient*, 1925, II, 127-142 所載。
- ②Eitel, *The Muh tien tsze chwen* (穆天子傳), *Ch. Rev.* XVII, 223-240, 247-258. 所載。
- Chavannes, *Mém. histor.* V, App. II. 所載。
- L. de Sausure, *Le voyage du roi Mou au Turkestan* (穆王のトルキスタン旅行), *J. as.* 1920, 151-156. *La relation des voyages du roi Mou* (穆王の

旅行記), 同上 1921, 247-280. 所載。The calendar of the Muh tien tsz chuen (穆天子傳の曆日), *New Ch. Rev.* 1920, 513-516. 所載。Le voyage du roi Mou et l'hypothèse d'Éd. Chavannes (穆王の旅行とChavannesの假説), *Tp.* 1920-21, 19-31 所載。

⑧Éd. Biot, *Tchou chou ki nien ou tablettes chronologiques du livre écrit sur bambou* (竹書紀年、或は竹上に書かれた年代表書の物), *J. as.*, III, xii (1841), 537-573; xiii (1842), 381-431. 所載。

Legge, *The Annals of the Bamboo books*, Ch. Cl., III, *Introd.* 所載。

④Chavannes, *Mém. hist.*, V, App. I.

⑤小川琢治。山海經編目論。藝文、一九一一年、八九九—九四二頁、一三六三—一三七二頁等に所載。

⑥Laufer, *Ethnographische Sagen der Chinesen* (支那人の人類學的傳説), *Festschrift für Kuhn*, 1909, 210. 所載。

⑦Conrady, *Indischer Einfluss in China im 4 Jahrh. v. Chr.* (西曆四世紀に於ける支那に對する印度の影響) *Zeitschr. deutsch-morgenl. Gesellschaft*, 1906, 385-351 所載。

飯島忠夫。支那の上代に於ける希臘文化の影響と儒教經典の完成。東洋學報、一九二一年(大正十年)一一六八、

一八三二四二、三五五—四〇四頁所載。

文學。人も知る如く、學者が主として従事したのは事實の再現そのものよりも寧ろ歴史的材料的批判的研究である。實際、古代の政治もよくは分らないが、文學の歴史ときては更に一層混沌として居つて、殆どいづれの文獻もその確かな年代が分らない有様である。

① *Coron von der Gabelentz* は諸々の著者の用語の中に年代學的標準があると考へ、その見地に立つて幾つかの文學的時期を決定し、之を彼は前古典期、古典期、後古典期と呼んだ。然し彼の分類の原理そのものに尙議論の餘地がある。即ち諸々の著者の言葉の相違は、年代の差といふよりは寧ろ、希臘に於て方言がその特徴によつて幾つかの部類に分たれたのと似た様な事から起つたものゝ様に思はれる。我々は只各々の著作を直接に研究することによつてのみ文學の年代的要素を抜き出すことが出来るだらう。然しこの仕事は殆ど全然手を著けられて居ない。

註

① *Chinesische Grammatik*, 1887.

現存する古代文學の中、詩は、其起源及び年代の種種異つた詩を集めた詩經（古典の一）と、三世紀の大詩人屈原とによつて殆ど代表され盡して居る。屈原の作品の一部分は嘗て *Pfizmaier* によつて譯され、その最も重要な部分である離騷は更に *d'Hervey de Saint-Denis* により、次で *Legge* により譯され、又屈原の弟子の一人である宋玉の一篇は *Erkes* 氏によつて翻譯された。然し最も主なる場所を占めるものは哲學的傾向のある散文であつて、その多種多様の議論と學說とは數多の翻譯によつて容易に知る事が出来る。孔子は何の著書をも遺さなかつたけれども、彼の談議は弟子等によつて集められた。同様に彼の學派の重要な二小著、大學と中庸も譯されてゐる。Dvořák が孔子の教義に關する研究の根本的要素を抽出したのは之等の書からである。孔子の門弟の中で最も有名な者の學說、即ち孟子（亦古典の一）は人の性は善なりと云ふ原理の上に築かれて居り、これより少し後れて正反對の意見を主張したものが荀子である。荀子は *P. Wiegner* によつて分析研究され、その二つの主な章の一は *Legge* により、他は *Duyvondak* 氏によつて譯された。かく

の如く孔子學派の著作に關する智識に對しては殆ど欠くる所がない。又之と反對學派たる墨子——この書は少し前から支那人の興味を特に惹いて居り、梁啓超氏は之に對して二つの重要な研究を爲して居る——の事に就ても識り盡されて居る。師(墨子)とその弟子達の著述を纂めたものが Forke 氏によつて完全に譯されてゐる。Forke 氏と Francke 氏とは又各々紀元前四世紀及び三世紀に支那に輩出した詭辯家に關する論文を書いて居る。それから三世紀に於ける法家の學派を最もよく代表してゐる所の、韓非子と稱する長篇は大部分 Ivanov 氏によつて譯された。之等の倫理的學派及び政治的學派以外の形而上學的學派はより少數であつてその最も古いものは易經の傳を作つた著者達の學派であるらしい。これは占術の本であつて、數回に亘つて翻譯されたが、いつも出來が大變惡く。Terrien de Lacouperie は易經の中に一つの字引と非常に古い諺語の集りとを發見したと云ふが、之は根據の無い假説である。而も最近 Haas 氏は復之に手を著け出した。易經の形而上學的な傳は孔子の作とされて居るが之が道家の理論の出發點として役立つた様に思はれるのである。

る。道家の三書、老子<sup>⑫</sup>、莊子、列子は譯されて居るし、(老子の書の眞偽は Herbert Giles 氏によつて論ぜられたが別に疑はしいものとは思はれない。尤もこの本は言ひ傳へられてゐる程古いものではないが)又道家の教義に就ては、その形而上學的敷衍の研究にも劣らずその神祕的な行の研究もよく究められて居る。思想の歴史は鈴木氏によつて企てられたが少々皮相的で、且變な所が無いとは云へない。次で Tucci 氏も亦之に手を著けたが、之はより良心的であり、更に胡適氏は新しい方法で之を取扱つた。即ち彼は主なる教義からその論理體系を抜き出す事に骨折つたのであつて、此點に於て彼は、支那の論理學の歴史のある一面の輪廓を明かにした。Masson-Oursel 氏や、墨子の論法の研究に従事した H. Maspero 氏と軌を一にするものである。要するに今日に於ては、古代支那の思想の諸種の様式を識るに充分な材料は存在して居る。然し、若しその發展の跡を辿るのは未だ困難であるとするならば、それは確かな年代學的な目標を缺いてゐることによるのである。

- ① A. Pfrizmaier, Das Li Sao (離騷) und die neun Gesänge, Denkschr. k. Ak. Wiss. Wien, phil.-hist. Kl. III, 1852. 所載°
- ② D'Hervey de Saint-Denys. Le Li-Sao (離騷) 1870. Legge, The Li Sao (離騷) Poem and its author, J. roy. As. Soc., 1895, 77-92, 571-599, 839-864 所載°
- ③ Erkes, Das Zurückrufen der Seele des Sung Yuh (宋玉の招魂), 1914.
- ④ China's Religionen. I, Confucius und seine Lehre (孔子とその教), 1895.
- ⑤ Legge, Ch. Cl., II (Mencius 孟子), Introd. Duyvandak, Hsün-tzu on the rectification of the Names (孟子正名篇), TP, 1924, 221-224 所載°
- ⑥ 梁啟超「離騷微(騷子の研究)」収米道藏書所収。騷子詩集 一九二四年。
- ⑦ Forke, Mè Ti des Sozialethikers und seiner Schüler philosophische Werke (社會倫理學者メーティの論著とその發展の事情と著述の経緯), 1922; The Chinese Sophists, J. Ch. br., XXXIV, 1901-02, 1-85. 所載°
- ⑧ Francke, Ueber die chinesische Lehre von den Bezeichnungen (支那の正名論), TP, 1906 所載°
- ⑨ Ivanov, Materialy po kitajskoi filosofii (支那哲學の資料) : uvedenie (註) : škola fac (汝家) : Han Fei-tsy (韓非子), Publ. Fac. lang. or. Univ. St.-Petersbourg, n° 39, 1912. 所載°
- ⑩ Legge, The Yi-king (易經), Sacred books of the East, t. XVI. 所載° 等々°
- ⑪ Terrien de Lacouperie, The oldest book of the Chinese, the Yh king (易經), and its authors. J. roy. As. Soc., 1882-83.
- ⑫ Hans Haas, China, 1917, Lehmann et Haas, Textbuch zur Religionsgeschichte, 1922. 所載°
- ⑬ P. Wiegert, Les Pères du système taoïste (Lao-tseu, Lie-tseu, Tchouang-tseu) (道家の教祖の元祖老子・列子・莊子) (翻譯とその研究の著作) 1918. Legge, The texts of Taoism (道家), Sacred books of the East, t. XXIX-XL (Lao-tseu, Tchouang-tseu). 所載°
- ⑭ H. Giles, Chuang-tzu (莊子), mystic, moralist, and social reformer, 1889.
- ⑮ Richard Wilhelm, Dschuang dsi, das wahre Buch vom südlichen Blütenland (莊子・道之南華真經), 1922; Liä dsi, das wahre Buch vom quellenden Urfund (老子・道之素樸真經), 1921.
- ⑯ The remains of Lao-tzu (老子), Ch. Rev. XIV-XVII 1886-89; Lao-tzu and the Tao Tè Ching

(老子と道德教), *Adversaria Sinica*, n° 8, 1909, 所載。

⑭Dvořák, *China's religionen*, II. Lao-tsi und seine Lehre, 1908 (老子と彼の教)。

Rev. Moore, *Notes on the philosophy of chap. 1-7 (of Chuang-tzu 莊子)*, Giles, *Chuang Tzu*, Int. XVIII-XXVIII 所載。

H. Maspero, *Le saint et la vie mystique chez Lao-tseu et Tchouang-tseu (老子及び莊子の中に見ゆる聖人と神秘的生活)*, Bull. Ass. fr. Amis de l'Or., 1922, 69-89, 所載。

⑮鈴木, 上代支那哲學史要, 一九一四年。

⑯G. Tucci, *Storia della filosofia cinese antica*, 1922.

⑰胡適, 'The development of the logical method in ancient China, 1922; 中國哲學史大綱' 第一卷(のち發刊)。

⑱P. Masson-Oursel, *Études de logique comparée. Évolution de la logique chinoise (比較論理學研究)*, 支那論理學の發達, Rev. philos., 1917, 59-76; 1918, 148-166. 所載。及び *La démonstration confucéenne, notes de logique chinoise prébud-dhique (儒教の論證)*, 佛教以前の支那の論理學に就て, Rev. hist. des relig., 1918, 48-54. 所載。

⑲H. Maspero, *Notes sur la logique de Mo-tseu (墨*

子論理學考), Tp., 1927, 1-64. 所載。

社會と宗教。古代の社會及び宗教の研究が眞の意味

に於て企てられてから未だ僅か數年にしかならない。

①第一步を踏み出したのは Chavannes であつて、封建的生活の大なる祭式である一つの土地の神の祭式に關する彼の論文がそれである。それから少し後に、

②Conrady は、先づ、傳説や典禮の研究によつて最も古い狀態の支那の社會を再現せんと試みた。然し之等の問題に就て我々が眞に明かに理解し始めたのは③Tranet 氏の重要な研究が出てからの事である。彼は貴族の典禮と一般俗衆の風習との對立のあつた事、就中結婚に關してそれが著しかつた事を明かにし、又現在の南部支那のある野蠻人間に若者達の大集會なるものがあり、その集會は若い男女の結婚を以て終るのであるが、それに似た事が昔あつた事をも明かにした。更に彼は古代以來公の宗教が除かんと努めた一聯の事實の重要性を強調し、又古代の宗教生活の確かな様相をも明かにした。かくて、此等の事實に關する研究は全く一新せられた。同時に、④Quistorp 氏は學校と原始的な「青



年の家」との密接な關係を闡明したし、又松本氏は古代宗教の中からトーテミズムの痕跡を分析した。

⑥Schindler氏は古代の聖職者に關する興味ある研究を企てた。但し彼の「最高實在」「Êtres supérieurs」に關する説には議論の餘地がある。最後に、公の宗教の全體がGrubeによつて要約された。この公の宗教の特徴は、一方に於て三禮の翻譯の結果主な文獻が解り易くなつた事と、他方、Laufer氏が古代の玉に關する研究によつて祭禮に於ける重要な附屬物(玉等を指す)に就ての考にしっかりと基礎を與へて呉れた事との爲に、一層明確になつたわけである。

註

①Chavannes, Le Dieu du Sol dans l'ancienne religion chinoise (支那の古代宗教に於ける土地の神), Rev. hist. des relig., 1901, 125-146. 所載。

Le Dieu du Sol dans la Chine antique, appendice à Le T'ai-chan (古代支那に於ける土地の神「泰旦」の附録), 1910.

②Conrady, China [1910], ap. Pflugk-Hartung's Weltgeschichte.

③M. Granet, Coutumes matrimoniales dans la

Chine antique (古代支那に於ける結婚の風習), Tp., 1912. 所載。Fêtes et chansons anciennes de la Chine (支那古代の祭と歌謡), 1919; La polygamie (polygamie?) sororale et le sororat dans la Chine féodale (支那封建時代の姉妹婚と姉妹姪婦)。

④Martin Quistorp, Männergesellschaft und Altersklassen im alten China (古代の支那に於ける若者組合と年齢階級), Mitt. Semin. Or. Spr., XVIII(1915), I, 1-60.

⑤松本信廣「支那の姓とトーテミズム」支那學、一九二一年—二二年所載。

⑥Br. Schindler, The development of Chinese conceptions of Supreme Beings, As. Maj., Prelim. vol., 298-366. 所載。Das Priestertum im alten China, 1re part. (古代支那に於ける僧侶 第一篇), 1918.

⑦Grube, Die Religion der alten Chinesen (古代支那の宗教), Religionsgeschichtliches Lesebuch, 1911. 所載。

⑧Legge, The Li ki (禮記), Sacred books of the East, t. XXXVII-XXXVIII. 所載。

P. S. Coudreau, Li-ki ou Mémoires sur les Bien-séances et les Cérémonies (禮記或は禮儀と儀典とに關する記載), 1899; I-li ou Cérémonial (儀禮), 1916.

J. Steele, *The I-li (儀禮), or Book of Etiquette and Ceremonial*, 1917.

Ed Biot, *Le Tchou li ou les Rites des Tchou* (周禮、或ひは周の典禮), 1851.

⑤Jade, a study in Chinese archaeology and religion, Field Museum, Publ. 154, 1912. 所載。

純然たる宗教的問題の外に、土地の制度が支那及び日本に於て最近の研究對象となつてゐる。即ち、定期的な籤の配分に順從してゐた所の、地主ならざる農民によつて共同に耕される耕地(井といふ)の制度、これは主として孟子に述べられてゐるが—この制度が果して實在のものであるか、それとも理想境なのであるか—問題となつてゐるのである。橋本氏は一九二二年にこの問題の状況を要約して居り、Demiéville氏は、傳統的な意見に對する熱心な反對者の一人なる胡適氏の説を要略して居る。

註

①橋本増吉、支那古代田制考。東洋學報、一九二二年(大正十一年)一—四五頁、四八一—四九四頁所載。

②Demiéville, B. E. F. E. O., XXIII, 1923, 494-499. 所載。

我國民間に俗歌の形式を藉りて學術上の法則を説いて居るのがあり、諳んずれば案外便利なことがある。例へば轉音の法則を詠つたのに次の様なものがある。

あわやのど、さたらな舌に

かは牙音、はまの二つは唇と知れ

右のうちは、まのははF音である。又入聲の法則を詠つて

漢音のフクツチキにて終る字は

四聲のうちの入聲とこそ知れ

因みに右は故湖南先生教話の一つ(T、M)